



新連載 関係からみた子どものこころと育ち

小林 隆児 Kobayashi Ryuji 大正大学人間学部臨床心理学科教授

生後から10余年、家庭生活を送ったことがない先天性疾患をもつ子ども

先日、ある大学の付属病院小児科病棟に入院している子ども(A男)についての相談を受けた。その概要は以下の通りであった。

小学校高学年になるA男は先天性の内臓奇形のために出生時から今日までずっと入院を余儀なくされていた。今でも経口で栄養を十分に摂ることが難しく、点滴で栄養の大部分を補給している状態である。両親も身体に様々なハンディを抱えていたため、A男は自宅にほとんど帰ったことはないという。しかし、学校は院内分校の教室に在籍し、多少なりとも学習の経験は積んでいた。そのような特殊な状況に置かれてきたA男との関わりに病棟スタッフ全員が苦勞していることが分校の担任の報告からわかった。

この子どもとの関わりで最も苦勞していることは、子どもの口から自分の気持ちや考えていることが直接語られることがないことだという。たとえば、入浴の時間になったので、入浴したいのかどうかこちらから聞いてもはっきりと返事をしないで遊んでいる。自分から直接言うのが恥ずかしいのではないかと看護師は感じているようで、そのため子どもがはっきりこちらに伝えてくるのを期待して、こちらからは必要以上に近づくことはしないように努めているという。担任が子どもに個別に聞いてみると入浴したい気持ちはあるらしいが、どうも看護師には直接話せないのだという。

日々の看護師の仕事の大変さや忙しさを想像すると、この子のようにはっきりと要求を口にする事なく、ぐずぐずした態度をとられると、多くの看護師がいららさせられ、ストレスを感じるのはよくわかる話であった。

担任に様子を尋ねていくと、他にもいろいろと気になることが語られた。たとえば、話しかけても目を合わせないので、こちらの話をしているのかどうかさえはっきりしない。その反面、学習面では経験不足もあって多少の遅れがあるにもかかわらず、精神的には大人びて早熟な印象を与え、看護師に対して何かと腹が立つようなことをわざとらしくやることが多く、そのためこの子に対して看護師の多くが否定的な感情を抱いていることもわかってきた。担任はこの子に対して、いろいろな場面でその都度どのように返答したらよいかを丁寧に具体的に指導するように心掛け、一つひとつ自分を他者に伝えるという体験を積み重ねていくことで自信を持たせられたらということであった。

子どもとの関係のむずかしさはどこにあるか

生まれてから今日までの10余年間、一度も家庭で生活を送ったことがないという子どもと親との間にアタッチメント(愛着)形成の問題が深く関係していることは疑う余地のないところであろう。そのことは担任も看護師も頭ではよくわかっているはずである。しかし、この子と彼らとの間で繰り広げられている関係のありようが両者のどのようなところの動きを反映しているのか、その点について理解に苦しんでいる様子であった。相談を受けたのはそのためであった。

これほど長期間入院している子どもであるからには、子どもと病棟スタッフの間ではこれまでに様々な体験を積んできたのであろう。互いに楽しい思いも経験したであろうが、つらいことや嫌な思いの方が多かったのではないかと想像されるのである。

ただ、話を聞いて筆者が一番気になったのは、子どもが今どのような気持ちで日々過ごしているのか、そのことについて思いを寄せる気持ちのゆとりが医療現場の人たちにはほとんどないのだろうかということであった。子どもがはっきりと自分の要求を口で伝えられるようにと看護師は期待し、かつ担任もそのような方向で指導や援助をしてきたのはそのためではないかと想像された。なぜなら、子どもとわれわれとのコミュニケーションにおいて、子どもにことばを用いるようにと指導するのは、子どものためというよりも、その方がわれわれにとって容易で、病棟生活もより円滑に運営できるからではないかと思われたのである。それほど病棟での看護師の仕事は大変なのであろう。

しかし、たとえ身体病で入院を余儀なくされているA男であっても、彼のこころの成長を願うのは医療従事者として当然の思いでもあるはずである。そうだとすれば、その日その日の効率的な運営を考えるだけでなく、長い目でみてA男のこころをいかに育むかという視点をも同時に考えあわせてみたいものである。

甘えをめぐる強いアンビバレンス

アタッチメント形成は、子どもと養育者との間に基本的な信頼感を育み、安心感をもたらす。その意味で、人間のこころの発達を考えるうえで最も大切な体験のひとつである。したがって、アタッチメント形成に深刻な問題をもつ子どもには親に対して甘えられなかったという強い欲求不満があるのは至極当然である。こ

のことが子どもと養育者との関係にねじれやずれを生み、複雑な彩りを添える。その結果、子どものこころに多彩な問題が生まれていくことになる。

先の事例に戻ってみると、いつも誰かに甘えたいという気持ちがA男に非常に強いことは容易に想像されよう。看護師に尋ねられてもすぐに応えられず、ぐずぐずしている態度には、この子の甘えたくても甘えられないというアンビバレントな気持ちが強く感じられる。恥ずかしさというよりももっとねじれた気持ちなのであろう。このように甘えをめぐる強いアンビバレンスを示す子どもたち(に限らず大人たちも)は、医療のみならず、保育、教育、福祉などのあらゆる現場でよく目の当たりにするし、そうした事例への対応で苦慮しているという相談を頻繁に受ける。

関係の基盤づくりをどう考えるか

アタッチメント形成に深刻な問題をもつ子どもたちは、いつも強い不安な気持ちを抱き、安心感をもてない状態にある。そうした子どもたちの心理状態を考えると、日頃の病棟の雰囲気がこの子にはどのように映っているか、まずは想像してみたい。看護師や医師の慌しい動きや言動は、彼らには、せかされるような、圧倒されるような、そして自分の中に侵入されるような響きをもって感じられはしないだろうか。そうであれば、子どもたちは身を固くし、より一層他者に対して警戒的にならざるをえないのではないか。ただでさえ自分を押し出すことのむずかしい子どもは、自分の領分を侵されないように身構えるしかすべがないかもしれないのである。

したがって、こうした子どもたちとの関係づくりは、ことばによるコミュニケーションをすぐに求めるのではなく、まずは子どもたちのそうした警戒心をいかにして和らげていくかにこころを砕くことから始めてほしい。そのためには、子どもに何かを求める前に、われわれ自身の子どもの関わりを振り返ってほしい。安心感のないところから子どものこころは育つはずはないからである。本連載のタイトルが「関係からみた…」とあるのは、子どものこころをわれわれ大人との関係の中で捉え理解することの大切さを述べていきたいからである。

次回より、アタッチメント形成に問題をもつさまざまな子どもたちを取り上げながら、いかにして彼らのこころを育ていけばよいか、読者諸氏とともに考えてみたい。